

論理的思考力&発想力入試 言語分野

受験番号

氏名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから9ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚とメモ用紙に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙、問題冊子、メモ用紙は表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は五十分間です。

次の写真に関する文章を読み、後の問題に答えなさい。

はたして、「いい写真」はどのような写真なのか。

まずはそんなことから始めてみたい。

「いい写真」について語るのはけっして簡単なことではない。人によってそれは大きく違い、けっして数値化できるわけではないからだ。例えば、どんなに*ピントがあっていなくても*露出*が適正でなくとも、個人の思いが詰まった写真は他の何物にも代えがたい。例えば、家族写真がそれにあたるだろう。どんなに有名だったり高価な作品よりも、個人にとってそれは大きな価値と意味を持つものだろう。

そのことは理解している。ここでは個人的に深く関わりのある写真は抜きにして、あくまで鑑賞する上での写真作品ということで話を進めていきたい。

ここに一枚の写真がある（口絵1）。写真家・森山^{もりやまだいどう}大道^{みちどう}が撮影した犬の写真だ。「三沢^{みさわ}の犬」と呼ばれている。森山は戦後の日本を代表する写真家で、街のスナップショットを中心に撮影をしてきた。20代の頃に、それまでの*既成^{きせい}の写真に反抗^{はんこう}するかのよう^{よう}に制作されたアレボケ（画像が荒れ、ブレていて、ボケているの意味）の世界観は多くの者に衝撃^{しょうげき}と影^{えい}響^{きょう}を与えた。写真界以外、さらには海外にも多くのファンを持つ*カリスマ的な写真家^{しやうしんか}といっている。



口絵 1

先日、私はこの「三沢の犬」についてある質問を受けた。

「なぜ、この写真は有名なのか」

というものだった。森山をしょうかい紹介する展示が

渋谷のデパートの中で行われたのだが、写真界

を中心にさまざまな人に同じ質問をするとい

う *しゅし趣旨だった。写真評論家、森山と関わり

ある方、写真家など立場や職業がちが違うさまざま

な者だ。改めていろいろ異なる見方、読み方ができ

ることを意識させられ興味深かった。その答え

が会場にパネルとなって展示された。

展示は一般いっぱんの方に向けたもので、森山大道と

いう写真家のことをまったく知らない、あるいは

名前くらいは知っているがくわ詳しくは知らない

といった方たち、さらには詳しく知っている

人が森山大道という写真家の *きせき軌跡を改めて

理解、再確認できるようによく構成されたもの

だった。

写真評論家の飯沢耕太郎はそこで、

「三沢の犬は森山さんの自画像。仮に、あの写真に森山さんの写真家としてのあり方が写っていたとしても、森山さんご自身、自分で撮ったあの写真を見て、自分で驚いちゃったんじゃないかな。その意味では、『撮れちゃった写真』っていうものが、すごく大事なんだと思うよ。『撮った写真』じゃなくて『撮れちゃった写真』」

と発言している。作家の大竹昭子は、

「何かに遭遇する瞬間を、これほど強く感じさせる写真はないのではないかな。単に野良犬に出会ったというだけでなく、オオカミを先祖にもつ生き物が駆け抜けてきた長大な時間に直面させる。その閃光のような力に、見る者の眼は射抜かれてしまう」

と語る。私は次のように答えた。

「圧倒的に独特だからじゃないですか、やっぱり。こんな風に犬を撮った写真なんか、他にないと思うし。犬に見えないですよ。まるで人間。こっちをクッと振り向いてますけど、あの感じ、あの目つきなんか、もう何かを考えていそうな雰囲気。いちど見たらずっと記憶に残ります。少なくとも他の誰も撮ったことのない犬の写真であることは、確かです」

いかがだろう。3人とも見事に違う答えを出している。

それぞれの答えを読んで、みなさんはどんな感想を持つだろうか。一人は「撮った写真」では

なく「撮れちゃった写真」だと語り、もう一人は「何かに遭遇する瞬間」を強く感じ、さらに「オカミ」をも連想させると語る。そして私は「犬ではなく」「まるで人間」だと口にする。

本当にバラバラ。まるで違うことを答えている。まだ「三沢の犬」の写真を一度も目にしたことの無い複数の人が、この3人の言葉を別々に耳にすれば、どんな写真を頭に描くだろうか。それぞれがまったく異なるイメージを描くのではないだろうか。あるいはまるで違う写真のことを指しているようにも聞こえるのではないだろうか。

「いい写真」を解く鍵が、ここに隠されている。「三沢の犬」は間違いなく「いい写真」といい。では、なぜそういえるのか。写真に抱く感想、感じ方が人によってまるで違うところが重要だ。つまり、さまざまな見方、感じ方、読み方ができるという点に注目すべきだろう。

① 絵ハガキやカレンダーの写真はつまらない、と聞いたことがある方もいるはずだ。「絵ハガキ写真」という言葉も存在する。きれいだが、深みが乏しく、凡庸という意味で使われることが多い。一概にすべてそうだとは思わないが、観光用に撮られた写真は確かにそんな一面を持っている。できるだけ多くの人、万人受けする「美しさ」「爽やかさ」「明るさ」といったものが求められるからだろう（そんな写真を撮ることは、それはそれで簡単ではないのだが）。

仮に、② 快晴をバックに山頂付近だけに雪が積もった富士山を撮った一枚があるとする。手前には湖が横たわっている。静かな湖面に富士山が見事に映っている。こう書いただけで、なんとなく頭の中にそのイメージが浮かび上がってはこないだろうか。

これは、日本人の多くが思い描く典型的な富士山の^{*}最大公約数的なものとして深く関係している。これまでに、そんな写真や映像（動画）を目にした機会が多いからだだろう。だから自然に頭にイメージが浮かんでくるのだ。この富士山の写真に対して、先ほどの3人のように大きく違った言葉が生まれるだろうか。おそらくないだろう。少なくとも私は「富士山に見えないですよね。まるで人間」なんて発言はしない。きれいとか美しいとか、見事、行ってみたいといった言葉が大半を占めるのではないだろうか。

それに対して「三沢の犬」はどれほど言葉を尽くしても、言葉だけでそのイメージを第三者に確実に伝えることは容易ではない。理由はあらかじめ共有されているイメージを、ほとんどの人が持ち合わせていないからだ。富士山のような共通認識、共通の価値観を持ち合わせていない。自分の記憶、過去の体験とすり合わせるができない、といってもいいのかもしれない。だから、犬でありながら、まるで人間などと言われても、想像が膨らむ余地がないのだ。

《中略》

写真は他のメディアよりも、観る側に託す部分^{たく}が大きい。例に挙げてみたい。人が映画を観て涙を流すことは珍^{めずら}しくない。小説を読んで涙を流すこともある。漫画も同様だろう。音楽はどうだろうか。それもあるはずだ。では、果たして写真はどうか。写真展の会場^まで写真を目にして、人は涙を流すだろうか。かなり稀^{まれ}だと思う。私自身、その経験はない。ただ私が行った写真展の会場^まで、涙を流した方を目撃^{もくげき}したことはある。しかし、これはかなり^{*}レアなケースだ

といえる。

それは求心力の差だと私は考える。映画と比べてみればわかりやすい。カメラが写（映）し出したビジュアルという点では共通するが、映画の画像は動き続けている。情報量が圧倒的に多い。さらに言葉、音楽といった強力な要素が加わる。確実に五感に訴（う）えてくる。さらに明確なストーリー、物語は観る者を強制する力を持っている。映画を逆回しして観る者はいないし、始（は）まりの次に* エンドロールを観るなんてことは基本的にしないし、できない。

それが写真となると事情が違う。写真展では順路があらかじめ考えられていることが多いが、まったく逆に観始める人はかなりの数に上るし、何より成立する。強制力がない。写真集も同じだ。最後のページから見始めることは可能だ（日本の右開きの写真集を多くの外国人は最後のページである左から見始める。右開きの書籍を見た経験がないから当然のことだ）。

写真展や写真集に言葉を添（そ）える場合もあるが、映画、小説、漫画と言葉の関係には遠くおよびない。それらの理由から、写真というメディアはかなり求心力が弱いと考える。額の中やページの中で写真は黙（だま）って静止しているだけだ。つまり、観る人を静かに待っているだけだ。どこまでも受け身なのである。

③ だからこそ観る側に委（ゆ）ね、観る側の観る力にたよるところが大きくなる。観る側の想像力も含（こ）めた写真を読む方に頼（た）らざるをえない。このことは、写真全般を語る上で重要なポイントだ。さきほど写真展の会場で涙を流した人を見たことがあると書いたが、それはやはり観る側が内

在させていた事情や感情と、目の前の写真が何かしらの理由で*シンクロしたからだと思っている。

(小林紀晴『写真はわからない 撮る・読む・伝える——「体験的」写真論』光文社)

*ピント……レンズを通った光が一点に集中するところ

*露出……写真を撮るときに取りこまれる光の量

*既成……すでに成り立っていること

*カリスマ……人々をひきつける資質や技能を持った人

*趣旨……あることをしようとするにあたってのねらい

*軌跡……たどってきたあと

*凡庸……ありふれていること

*最大公約数的なもの……一番大きな共通点のようなもの

*レア……非常に少ない様子

*エンドロール……映画などの映像作品で最後に流す出演者や制作者の氏名などの字幕

*シンクロ……ここでは、二つ以上のものが合うこと

〔問題一〕「三沢の犬」について、次の問題に答えなさい。

(1) 筆者は「三沢の犬」が「いい写真」であると述べていますが、その理由を本文中の言葉を用いて、二十字以上二十五字以内で答えなさい。

(2) — 線部②「快晴をバックに山頂付近だけに雪が積もった富士山を撮った一枚」とありますが、この「富士山の写真」と「三沢の犬」とのちがいを説明した次の文章の空らん□に当てはまる言葉を本文中から十五字以上二十字以内でぬき出しなさい。

「富士山の写真」は、日本人の多くに富士山についての□があるため、言葉だけで説明されても写真に写っているものを想像することができるとは、「三沢の犬」に写っている犬の姿については、人々はそれを持っていないため、言葉だけで説明されても、写真に写っているものを想像することができない。

〔問題二〕 — 線部①「絵ハガキやカレンダーの写真はつまらない」という意見について、あなたの考えを理由もあわせて述べなさい。

〔問題三〕 筆者の考える映画と写真とのちがいを答えなさい。

〔問題四〕——線部③「だからこそ観る側に委ね、観る側の観る力にたよるところが大きくなくなる。観る側の想像力も含めた写真を読む力に頼らざるをえない。」について、次の問題に答えなさい。

(1) 写真を鑑賞するために必要な「観る側の想像力も含めた写真を読む力」とはどのような力か、くわしく説明しなさい。

(2) 「観る力」「読む力」は、写真などの芸術鑑賞以外の場面でも、毎日の生活を送る上で大切なものです。あなたが(1)で答えた力が、学校生活の中で活かされるのは、どのような場面ですか。これまでの学校生活の経験をもとに考えても、これからの学校生活を想像して考えても、どちらでもかまいません。また、そのような場面に出会うことで何をできることができ、あなたがどのようなことができる人に成長させると考えますか。次の条件にしたがって書きなさい。

《条件》

1. 第一段落には、具体的な学校生活の場面を取り上げて書くこと。
2. 第二段落には、そのような場面に出会うことで何を得ることができ、あなたがどのようなことができる人に成長させると考えるかを書くこと。
3. 三百五十文字以上四百字以内で書くこと。
4. 原稿用紙の正しい使い方に沿って書くこと。

